

## 品種の紹介

### 種子島で期待される株出し多収なサトウキビ新品種「はるのおうぎ」

#### 【開発の背景】

種子島は、国内の主要なサトウキビ生産地域の中では多収地域として知られていました。しかし、最近は大人手不足のため、収穫や植え付けが集中する早春の忙しさの度合いが増してきました。そのため、株出し（収穫後に株から再生してくる萌芽を育てて翌年再び収穫する作型）に向けた管理作業の適期を逃したり、新たな植え付けができずに欠株が多いまま株出しを続けたりすること等により、株出しでの収量が減少しています。

こうした問題に対処するため、当センターでは萌芽性に優れ、株出しで多収となる品種開発に取り組んできました。これまでに、製糖用品種とサトウキビ野生種との種間交雑によって、株出し萌芽が旺盛で多収となる種間雑種を育成してきましたが、糖度が低く、製糖用には利用できませんでした。しかし、この種間雑種をもう一度、製糖用品種と交雑することで、株出しでの多収性と高糖性を両立した品種開発に成功しました。そして、2019年3月に、国際農林水産業研究センターと共同で品種登録出願した期待の新品種は、「はるのおうぎ」と名付けられました（写真）。



写真 サトウキビ品種「はるのおうぎ」の立毛の様子  
（左から「農林22号」、「はるのおうぎ」、「農林8号」）

#### 【品種名の由来】

「はるのおうぎ」という名前は、農林水産省による品種名称アイデア募集に応募された305件（重複を含む）を基に、関係者で協議して決定しました。育成過程での系統番号「KY10-1380」の「一、三、八、〇」を組み合わせると「春」になること、萌芽性と分けつ性に優れ、春の草姿が扇のように見えることなどが命名の理由ですが、なによりも、種子島のサトウキビ産業に春をもたらしてほしいという皆の願いを込めています。

#### 【品種の来歴、特徴】

「はるのおうぎ」の母親は飼料用品種「KRF093-1」、父親は製糖用品種「農林24号」です。「KRF093-1」は、世界的に有名な製糖用品種「NCo310」と、インドネシアのサトウキビ野生種「Glagah Kloet」との種間雑種です。「はるのおうぎ」は、サトウキビ野生種からわずか2世代で実用化に至った、世界的にも稀な製糖用品種です。

「はるのおうぎ」は、個々の茎は細いものの、分けつ性と株出し萌芽性に優れるため、茎数が非常に多くなります。「農林8号」に比べて茎数が5～7割多く、収量は春植えで約3割、株出しで約6割の増収となりました（表）。糖度は「農林8号」と同程度のため、砂糖の収量に相当する可製糖量は「農林8号」よりも春植えで約3割、株出しで5割以上多くなりました。また、倒れにくい機械収穫しやすく、機械収穫後の萌芽も良好です。株出しの収量が減少傾向にある種子島において、収量回復の起爆剤として期待されています。

「はるのおうぎ」は、種子島の奨励品種として、島内のサトウキビ収穫面積の約5割に相当する1150haへの普及が見込まれています。また、現在、鹿児島県の奄美地域や沖縄県の各地域でも奨励品種化に向けた栽培試験を実施しています。近い将来、種子島以外の地域でも「はるのおうぎ」が栽培されるようになるかもしれません。

【作物開発利用研究領域 服部太一郎】

表 「はるのおうぎ」の栽培特性

	品種名	茎数 (本/a)	茎長 (cm)	茎径 (mm)	収量 (kg/a)	糖度 (%)	可製糖量 (kg/a)	発芽性	萌芽性	分けつ性	耐倒伏性
春 植 え	はるのおうぎ	1,439	224	20.6	973	12.4	110	高	極高	強	強
	(対農林8号%)	(155)	(92)	(92)	(129)	(102)	(131)				
	農林8号	931	244	22.5	756	12.1	84	高	中	中	やや強
株 出 し	はるのおうぎ	1,887	244	19.4	1,172	11.8	127	-	-	-	-
	(対農林8号%)	(171)	(103)	(95)	(163)	(95)	(155)				
	農林8号	1,106	238	20.5	719	12.4	82	-	-	-	-

注) 農研機構九州沖縄農業研究センター種子島研究拠点にて実施した生産力検定試験の成績による。  
春植えは2015～2018年度の4作平均、株出し（春植え収穫後の1回株出し）は2016～2018年度の3作平均の成績を示す。